

## 令和7年度第4回富山県総合教育会議 議事録

1 日 時 令和7年10月28日(火) 9:00～10:10

2 場 所 県庁4階大会議室

3 出席者 富山県知事 新田 八朗  
富山県教育委員会  
教育長 廣島 伸一  
委 員 坪池 宏  
委 員 大西 ゆかり  
委 員 黒田 卓  
委 員 牧田 和樹  
委 員 松岡 理

4 事務局出席者	経営管理部長	田中 雅敏
	理事・教育次長	小杉 健
	教育次長・教育みらい室長	中崎 健志
	教育次長	板倉 由美子
	学術振興課長	水上 優
	教育企画課長	森安 祐成
	県立高校改革推進課長	丸田 祐一
	他関係課職員数名	

### 5 議 事

- (1) 「新時代とやまハイスクール構想」の進め方について
- (2) 次期「富山県教育大綱」の素案について

### 6 会議の要旨

司会が開会を宣し、新田知事の挨拶後、富山県総合教育会議運営要領第3条並びに知事の指名に基づき、以後の議事については田中経営管理部長が進行した。

#### (1) 「新時代とやまハイスクール構想」の進め方について

(田中経営管理部長)

事務局から、「新時代とやまハイスクール構想」の進め方について説明する。

丸田県立高校改革推進課長が、資料1「「新時代とやまハイスクール構想」の進め方について(案)」に沿って説明した。

(田中経営管理部長)

委員の皆様からご意見いただきたい。

## ○委員からの意見

(牧田委員)

基本的な進め方はこれでよいと思うが、懸念点が2つある。

まず1つ目は、この実施方針の前に基本方針を固め、それをもとに色々な議論を尽くして今回の実施方針が出てくる。つまり、基本方針の考え方や、色々な方向性というのは、実施方針の中に含まれていないとだめだと思っている。

例えば理念を作り、方針を作り、戦略を作りという企業経営のような計画ではなく、大雑把なものから段々と細かくしていくという方針だと思っているので、後から出てくる方針の方が、最新というか、一番現実に近い考え方であるということをまずは認識すべきというのが1つ目の懸念。色々なご意見を読む限り、行ったり来たりしているので、そうではなく実施方針はその基本方針を踏まえた最新版であるということを、まずは周知することが大事。

もう1つの懸念点は、1つ目にも関わることだが、今回バックキャストで物事を進めている。バックキャストは、目指す姿があるからバックできるわけで、その目指す姿をどのようにバックしていくかが大事。

一番大きなポイントは、実施方針の内容を今後見直していくことと、それをどういった形で各期の設置方針に落とし込んでいくのかということ。

バックキャストするのだから、ある程度の将来の姿は見えているが、それを一気に、15年後はこうになると出してしまうことが果たして良いのだろうか懸念している。その開示の仕方はすごく大事で、個人的な意見だが、15年かけてやっていくことだから、最初に全部を明らかにあまりしない方がよいと思っている。

そもそもこの「新時代とやまハイスクール構想」の大きなコンセプトがどこにあったかという、今ある学校を全部リセットするというのが基本的な考え方だったので、これから各期で示される学校は、新たな学校ができるというイメージ。もちろん、既存の高校の跡地を使ったりはすると思うが、どの高校が残り、どの高校が消えるという発想はもう捨てなければいけないというのが、今一番大事なポイントだと思っている。そこを併せて、もう少し周知することが大事。各期の説明の仕方というのはかなりナイーブなことなので、細心の注意を払う必要がある。

一番大事なものは「こどもまんなか」であるから、子ども達が夢と希望を持って選択できる新たな学校を示すことが大事で、現在の高校と関連付くような提示は避けたい。その辺は大人の論理というか、色々な駆け引きの中で、子ども達を犠牲にしてはいけない。

(黒田委員)

牧田委員がおっしゃったことについては、その通りと思う。

特に第1期設置方針で、設置する学校像が、より具体的になるのかもしれないが、その下に実際に色々な学校を作っていくというところが、それぞれの新しい学校の

経営、設置計画みたいなものになると思う。

できれば実施方針から設置方針を作る段階から、実際に学校に加わっていただきながら、どういう学校を作っていくのか検討していただく方がよい。

ただそうすると、どこの学校が（加わるか）ということが出てくるため、その辺りは、慎重にやらないといけないかもしれない。設置方針を具体的に落としていくところが非常に重要。

進め方自体に関しては、こういう形で進めていただければよいのではと思う。

（大西委員）

全体の構想の進め方についてはこの通りでよいと思う。

第1期の議論について、早く取り掛かった方がよいのではと申し上げたが、その対象となる学校、その学校を作っていくリーダーとなる方にぜひ、議論に入っていただくことが望ましいと思う。

私達も、この新しい形の学校についてはまだまだ勉強が足りない気がする。伊奈学園高校を見学させていただいたが、実際に見て、その学校の先生から聞いて、明確なイメージやビジョンを持つことにより、これが良いのだという私達の気持ちに力をつけてくれた。

そのため、新しく作る学校、未来探求ハイスクールがどういう形のものになるのか、どういうイメージをされているのかを事務局、教育委員、ハイスクール構想検討会議の委員、それぞれ、皆で共有できて、検討していけたらよい。

（坪池委員）

進め方についてはまさにこれでよいと思うが、そろそろ、どのような学校にするのかというイメージを作っていく必要がある。

具体的には、カリキュラムをどうするかという話になってくる。その時には、学習指導要領上どうなのかということが必ず大事になってくるため、例えば、複数キャンパス制のことも議論に出ていたが、そのあたりも学習指導要領上どうなのか、どこまでが可能でどこまでは無理なのかという整理をしながら、開設科目も、どのようなものがあるのかということまで、今すぐには難しいかもしれないが、今の議論と合わせてやっていく必要がある。

（松岡委員）

進め方について特に異論はない。これまでの色々なところからの意見が丁寧に書かれている。

そもそも大規模校は必要か、数が本当にこれでよいのかなど本当に根本的な問いがあり、それに真摯に答えているので、丁寧な議論があるし、そういった素朴な疑問、当然皆が思うようなことがきちんと議論、議題として扱われてきているということもすごく良いことだと思っている。

他の委員もおっしゃったように県内の県立高校、役割やカリキュラムといったようなことの全てが変わる。特に際立って新しいところとしては大規模校のところで、

特に今回の意見聴取の中で、これは重要だなと思うのはこの若手教員の先生方がこんな学校を子ども達に用意したいという夢を語っていただいたような提言書も出ていたが、その中でワクワクするものという表現が載っている。

第1期に入る子ども達が今ちょうど小学校6年生、来年中学校に入ったときに、僕たちが高校に行くときにはこんな学校に行くのだ、というようなことを示されるとまさにこれはワクワクする。

そういった子ども達がワクワクできるような、あるいは、働いている人達や周りの人たちもワクワクできるようなものを作っていけたらよい。

(牧田委員)

進め方の話ではないが、実施方針に入れておいた方がよいと思うことをこの場で言わせていただく。

さっき「こどもまんなか」という話をしたが、現実には既存の高校の卒業生がいる。つまり同窓生と言われる方がいるわけで、どうなるかわからないが、一旦リセットをするということは、理屈上、すべての同窓生がその学校の籍を失うということになる。

その同窓生の扱い、同窓会の扱いを、どういった方針でやるかというのやはりこの実施方針にも入れておいた方がよいように思う。

もちろん「こどもまんなか」なので、卒業した者はどうでもよいという話になるかもしれないが、それはそれで、現実には皆それなりの思い入れを持っておられるので、その辺のケアも必要だと思う。

そのため、その1行を実施方針に、ぜひ入れておいていただきたい。具体的な案としては私の考えだが、県の方で例えば同窓会支援センターのようなものを作り、県下の県立高校を卒業した同窓生の名簿等を一元管理するとか、今まで各学校にあった同窓会の事務局の事務を代替するというようなことは必要かなと思う。

(広島教育長)

この構想、厳然たる事実としてあるのが、15年後にはこれだけの人数になってしまうということ。そこに向かって1つ1つ事実が出てくる、積み上げていく、それに基づいてどういう学校を作っていくかということ。

そういった中で色々な方のご意見については、やはりこれからもしろいろ聞いていかなくてはいけないというのが、私どもの基本スタンスというふうに考えているので、また様々なご意見聞かせていただければありがたい。

(田中経営管理部長)

今回の協議内容を踏まえ、知事からご発言をいただきたい。

(新田知事)

基本目標である「新時代に適応し、未来を拓く人材の育成」、この実現を目指すということは合意事項だと思う。

また、少子化が進む中でも、生徒に多様な選択肢を提供できるよう、特色ある新時代とやまハイスクール、これを県内にバランスよく配置をしていくということ。実施方針の素案で示した、令和20年度までに目指す姿に向け、3つの期に分けて、段階的に再編を進めていくということ。

このように構想の根幹となる部分の方針は変えずに進めていくということで、合意できたと受けとめている。

最後に牧田委員のご発言にあった同窓生、同窓会は学校そのものではないが、確かに大切なこと、これまでの歴史を作ってこられた方々であるから、ここに対するケアというのは、牧田委員のご意見を尊重したい。また、さらにもう1歩踏み込み、構想を各期で具体化していく際に、場合によってはこの方々を話し合いの中に入れていくということもあってもよいのかなと。

圧倒的な反対勢力になるかもしれない方々を、ぜひ、この構想を共に進める仲間として巻き込むことができないか。そんなことも工夫していければと思い聞いていた。

実施方針については必要な事項について記載するとともに、農業・工業・商業高校の将来像、また、職業系専門学科の開設の方向性などについても、今後検討した結果を反映し、来年の1月ごろまでに取りまとめたい。その後は、第1期校に関する検討を行い、令和8年度前半をめどに再構築の対象校などを示す、新しい言葉になるが、「第1期設置方針」を公表し、令和11年度の設置を目指していきたい。

引き続き、「こどもまんなか」の視点を変えることなく、構想を着実に進めていくよう、引き続きご協力、ご理解をお願いします。

(田中経営管理部長)

ただ今の知事の発言にもあったが、事務局においては本日のご意見をもとに内容を精査し、「新時代とやまハイスクール構想」実施方針を進めていただくようお願いする。

それでは、次の協議に移る。

## (2) 次期「富山県教育大綱」の素案について

(田中経営管理部長)

事務局から、次期「富山県教育大綱」の素案について説明する。

森安教育企画課長が、資料2「第3期富山県教育大綱」策定の進捗状況と今後の予定、資料3・資料4「第3期富山県教育大綱（第4期富山県教育振興基本計画）素案」に沿って説明した。

(田中経営管理部長)

委員の皆様からご意見いただきたい。

## ○委員からの意見

(坪池委員)

全体を通して、大変よくまとまっている。

特に参考指標の目標だが、教育の成果というものを数値化するのは大変難しい作業であるが、非常によく考えられており、取り組みやすく、そしてわかりやすいものになっている。これまでのものより随分改善され、深化されてきたのではないかなと思う。今後、目標達成に向けてしっかり取り組んでもらいたいと思う。

その前提で話をするが、目標を設定し、それに向けてカリキュラムを組んでいく下降型、下へ下ろしていくカリキュラムになっていくと思うが、それを過度に運用してしまうと、生徒の実態あるいは学校の実態がなおざりになってしまうケースもある。そのようなことにならないように配慮していただきたい。

(大西委員)

今回の大綱では、前回とは違い、「教員」という言葉が全部「教師」という言葉になっているが。

(森安教育企画課長)

これまでは「教員」または「教職員」という表現を用いてきたが、今、新しい総合計画を同時並行で作成しており、その中で統一してわかりやすい言葉にするという議論があり、総合計画も含めて「教師」という言葉を、案として使っている。

(大西委員)

大綱内の用語が全て「教師」となっていることに、大きな違和感を感じた。

教員採用試験はそういう言葉でもう変えることはないし、全国的にも、例えば新聞やテレビ等メディアで報道されるときも「教員」という言葉が使われる。県では統一されても市町村はどうなのかということもあるので、またご検討いただけたらと思う。

前回の大綱は、目標があり、方向性があり、現状と課題など、教育を取り巻く環境の変化、取り組みの基本方向、主な施策といったように、結果として文章量がすごく多いが、丁寧で多くの記述があり、それを追っていくとストーリーとして、だからこのような施策が展開されているというところはとてもわかりやすかった。

今回、シンプルになり、施策で目指す姿から、具体的な取り組みを見たときに、少し足りないところ、穴あきになっている印象があるが、きっとそこは市町村の役割と県では捉えているのだと思い読んだ。そうなると市町村の大綱との関係性や、逆に市町村から県の大綱にはこういうことを盛り込んで欲しいという要望などもあると思い、そういったことは考えておられるのかなと思った。

最後にもう1点、目指す姿を、シンプルに書いてある部分はそれでよいと思うが、目指す姿に、現在の問題点なども盛り込まれているようなところ、そこは削除してもよいのではと感じるところもあった。

例えば、資料4の32ページの「教師は、働き方改革により長時間勤務が是正され、

心身ともに健康な状態で」と書いてあるが、「働き方改革により長時間勤務が是正され、」という部分はなくてもよく、それは施策の方に入ればよいので、「教師は心身ともに健康な状態で、子ども一人ひとりと向き合う時間」としてよいのではないかと、そういう箇所が幾つか見られたので、またご検討いただきたい。

(牧田委員)

大綱の作り方について、前回子ども達の成長段階に応じて見やすくしたらどうかという提案をしたが、残念ながら省略された。

施策1つ1つの指標を見れば見るほど、本当にこれでよいのかと感じている。例えば子どもが10分家で読書をする割合とあるが、10分読書したらどう変わるのかというのは非常に曖昧。先ほど坪池委員も述べられたが難しいことを無理やり数値化しているため、何かミスリードのようなものが起きていると感じる。

なぜそうなるかという、その施策を作り込む段階で、作り込むだけの十分なファクトをしっかりと集められていないからではないかと思う。

つまり、現実には色々なことが起き、それを解決するにはこういうことなのだというロジックが、本来は1つ1つの施策になればいけない。それがあるからこそ、こういうことを指標にすれば良いと見えてくるが、そういう繋がりが見えてこない。フォーカスできない1つの原因は、先ほど申し上げたとおり、成長段階において、その視点が欠けているからだと思っている。

例えば県政世論調査の項目はまさにその通りだと思うが、問27、28において「教育（小学校・中学校・高校）の教育内容で強化すべきものは何ですか」と聞いている。小学校と中学校と高校で絶対違うにもかかわらず、それを一括で聞いてしまうセンスのなさ。

これはまさにその教育大綱全体にあらわれていると思っており、少なくともその施策の中で、小学生段階、中学生段階、生涯学習でいくと現役世代、リタイア世代といった、対象者に応じて施策が作られるべきだと思っているので、その辺は深く考えていただきたい。

それから、先ほど大西委員が「教員」と「教師」という話をされたが、大きな違いだと思っている。

単に総合計画で「教師」という言葉を使っているから使うというのはやめてほしい。「教員」と「教師」は明らかに違う。「教員」というのは公務員の延長上の言葉だが、「教師」は師であり、教えることに対して責任を持たなければいけない。

ただの呼び方かもしれないが、これを「教師」と書くことによって、まさに今先生方の覚悟と責任が付いてくる。そういう意味では、その「教師」という言葉をなぜ使うのかということは定義されておいた方がよい。

(黒田委員)

大綱なので、こういう形でまとめざるを得ないのかなと理解をしているが、2期と比べてどの部分がどう変わったのか、どこを見直したのかというところが少しわかりにくい。今回の第3期の大綱の特色、新しくこう変わったという部分をもう少し

しをわかりやすく表現していただければと思う。

指標については、指標自体の作り方が少しわかりにくい。なぜこれが指標として入ってくるのか疑問に思うところが若干あり、目標値に関しても、果たしてこれでよいのか、何を根拠に 2030 年の目標値として提示しているのか若干わかりにくいところがあった。

どういうところを今回は力を入れたのか、入れていくのか、ここが新しくなっているといったことをもう少しわかりやすく示し、前文などにわかるような形にしておかないと、県民にも前の大綱と一緒にのではという感じにしか見えない。

(松岡委員)

大綱について色々なところから出されているご意見は非常に興味深く勉強になると思いながら拝見した。

今年の甲子園の富山県代表で出た子ども達、県外のご出身の方が多かったということで、これもある種選ばれているということだと思う。ここに書かれている人口減少化社会でどう良い学校教育を作るかという話だが、県内の子ども達も、県外で学びの場や活躍の場を求めて出ていく人達も多くいる一方で、今回の野球の子ども達みたいに選んできてくれる子もいる。そのような中で、なるべく富山県にいて欲しい、なおかつ来て欲しいという、その魅力づくりが、どういった点なのだろうなと思い読んでおり、良くしていくということに関してはよいが、少し気になった点がある。

多様な学びを保障するとか ICT を活用した教育を進めていくなどあるが、例えば、一般の社会の会議などはオンラインで家にいてもできる時代になってきている。オンラインの教材、先生方のお話を聞き、それをもって単位とするようなことが一般社会では行われているが、学校場面ではまだ学校に行って履修したということしか認めないところもある。

この辺の柔軟化がなされると、例えば何らかの事情で教室には入れないが学ばせたい、授業を受けさせたいという保護者のニーズを満たすことにもなっていくのではないかな。

また、今夏がものすごく暑く、運動させるのが大変で、企業は熱中症対策をしっかりやらないと労働基準法違反になってしまうような時代なので、学校の子も達に体育で 50 分間走らせると言ったらもう明らかにリスクである。エアコンがついていない体育館があるとアンケートに書いてくれている子もあり、ここは優先順位としては、より深刻というか高いと思う。

(廣島教育長)

指標とその施策の置き方だが、そのライフステージに応じた取り組みや、教育の方針とライフステージを各施策のプロットとして置いていくことについては、大綱をベースにこの後、毎年やっていく施策の中で、その表を作っていくというやり方はあるのかなと事務局内では議論をさせていただいていた。

また手法については一通り色々な議論もしたところではあるが、なかなか具体的



な指標のとり方が（難しく）、それは問題点をどう把握するかということと繋がるのだらうと思うが、そういったところも注意しながら、今後やっていければと感じた。

（新田知事）

取りまとめ前に一言言わせていただく。

よくまとまってきたとは思いますが、ただ1つ、不登校というのはやはり深刻な問題だが、不登校についての記述というのがあまりない。あくまで学校に行き、そこで繰り広げられる色々なことがあるということであり、不登校の子には富山県の良い教育を享受できないわけだから、これはやはりもったいない。今学校に行くのは当たり前という時代ではないというご意見があるのもよくわかった上で、そうではあるものの、やはり学校に楽しく行ってほしいと思う。

この大綱の素案の中には、不登校に対してこういうケアをする、こういう対応をするといった記述は色々ある。

例えば、「施策項目②多様な学びの機会の確保」には、不登校など児童生徒の諸課題に対し云々という話がある。それから、魅力ある学校にして通いたくなるようにする、先生も心身ともに健康で健全で生徒達としっかり向き合う、これらももちろん不登校を抑止することに大きく寄与すると思う。

少しずつ不登校に対する記述はあるが、やはり煎じ詰めれば、学校に行きたい、行きたくなる学校づくりというのが、根本なのだと思う。目指すところは、楽しい学校、行きたくなる学校といった記述もどこかにあればよい。学校教育においては、それをある意味では大きな目標として、目的としてしっかりと書き込むことも必要なのではないか。

その上で、それでもやはり色々な理由があって不登校になる。家庭で親が病気だったり、DVだったりあるいはネグレクトだったり、学校での人間関係、いじめ、それから成績が上がらないとかブラック校則があるとか、色々な状況があるが、そのような問題はもちろん1つ1つ解決していく必要がある。

目指すところは、楽しい学校、行きたい学校、行きたくなる学校、そういう意味で学校に行くのは楽しみだという指標について、100%を目指すということは徹底的に目指していきたい。そんな大綱になればと思う。

（田中経営管理部長）

今回の協議内容を踏まえ、知事からご発言をいただきたい。

（新田知事）

事務局においては、今日いただいたご意見をもとに、素案に必要な修正を施し、パブリックコメントに付する準備を進めていただきたい。

この教育大綱は、県と教育委員会が足並みをそろえて、教育の振興に取り組めるように、教育振興基本計画としても位置づけるということもご理解をいただきたい。

(田中経営管理部長)

事務局においては、本日のご意見をもとに内容を精査し、準備を進めるようお願いする。

以上で本日の議事を終了する。

この後、事務局より閉会の挨拶を行った。

以上